

私のできる福祉

伊勢原中学校 三年

ふるさとあり
古郡 華

私には九六歳の曾祖母がいる。母の祖母で、

私の祖父母と一緒に暮らしている。コロナ禍

でしばらく会えていないが、それまでは年に

数回、会う時はいつも喜んでくれて、小さい

頃から私をともかわいかった。てくれていた。

私はいまなことから、半年間母の実家で、

祖父母、曾祖母と一緒に暮らすことになった。

曾祖母との暮らしは、社会の教科書では知

らないような時代に生まれた人と共に生活す

るという、私にと、てある意味とても刺激的

で、貴重な体験だった。

元気い、ぱいに見えた曾祖母も、年相応に

足腰が弱か、たり、物忘れが激しかったり、

祖父母の言うことを聞かずに怒られたり。拳

向の果てには、それに対して逆切れする始末。

今の自分から見ると、まるで牛のかかる子供

のようだった。年を取ると子供に返ると聞いたこ

とがあつたが、こういうことなのかと納得した。

曾祖母の一日は長い。朝（夜中）三時に起きて寝るのは十時過ぎ。その間に何度もうたた寝をして体力をもたせている。朝晩曾祖父の仏壇に向かつておしゃべりをし、三食きちんと食べ、自分の掃除洗濯をして、たまに買い物にも行く。誰かに頼めばすぐに終わってしまうようなことも、何倍もの時間をかけて自分でする。自分の力でやりたいのだからと思う。

時間はたくさんある、そういう事なんだと思う。

そんな曾祖母の楽しみは、デイサービスの気分に入りのおじさんに会うことだ。私から見るとおじさんだけだけど、曾祖母から見れば若者のイケメンなのだろう。彼が迎えにくる朝は、前日の夜から着る服を選び、お化粧品も念入りにして、お迎えの十五分前から玄関で待っている。おじいちゃんに怒られるかな。と笑って言う曾祖母は、なんて可愛いのだろう。

うか。

ある日、曾祖父とおしゃべりで、早く迎えに来てね」と話しているのを聞いた。言。た後に、「いや、まだもう少し先でいいか」と訂正していたのは笑ってしまっただけれど。私は少し驚いたので理由を聞くと、こんな風に返ってきた。

「自分のことかも」とできなくなっただけに迷惑をかけたくないのもあるし、あとは、そのやねえ、もう自分と同じ人が誰もいなくな。

てしまっただけから。私は想像してみた、自分の周りから同年代の人がいなくなっただけを。学校からも塾からも、地域からも自分よりずいっと年下の人しかいない世界。少しぞとした。そうか、もう何年も曾祖母はそんな世界に生きているんだと思っただ。

年を取ると子供に返る、確かに、本人は子供に返るところもあると思う。では周りとはどうか。一概には言えないが、やっぱり、お年寄りに対して子供と全く同じように思えるか、

と問えば難しいと思う。何も知らない、できない赤ちゃんに優しくするのは普通だけれど、人生の過ぎた先の大きな子供に對しては、冷たく接したり、疎ましく感じたり、お荷物に感じたり、すぐに怒ってしまったりする。苛立つ気持ちからないわけではないが、やはり社会はもう少しお年寄り優しくなるべきだと思う。皆老いて、いずれ通る道なのだから。そしてそこにはそれぞれの人々の歴史と想い出があり、長く険しい道を歩んできたこと、それだけで尊敬に値すると思うから。曾祖母に手伝うことを聞くと決まっていた。大丈夫。一緒におやつでも食べよう。と返ってくる。難しいことは分からないが、私にできると一番の福祉は、一緒に過ごすことだと、曾祖母の笑顔の向こうにふと見えた孤独から学べた気がする。一緒におやつを食べながら、曾祖母の話を聞き、一緒に笑い合うこと。大好きなひいおばあちゃん。同じ時代を生きていくことに感謝して、また会いに行こう。